

2009. 12. 10
vol. 2

シネマ・ド・リぶらの
『アパッチ砦』 コラム・ド・シネマ

「アメリカならではの映画」

作品は1948年公開の映画であり、私も少年時代に初めてみたアメリカの本格的西部劇として、日本では見られない広大な荒野を砂塵を巻き上げ走る幌馬車・騎兵隊の勇姿、など忘れられない記憶が残っている映画だ。

ストーリーとしては、南北戦争が終わり、その失策でインディアンと抗争を繰り返しているアパッチ砦の辺境の地に、サーズディ中佐(ヘンリー・フォンダ)が赴任してくる。その砦には、勝手な扮装で規律も乱れた兵隊たちとヨーク大尉(ジョン・ウェイン)、コーリング大尉(ジョージ・オブライエン)が居るが、司令官として自分のやり方で指揮を執り始める。最初は、アパッチの首領コーチーズと和平交渉に、ヨーク大尉を使者に行かせるが、和平に応じる振りをして総攻撃をする。ヨーク大尉は裏切り行動に反対し、アパッチの攻撃方法を伝えるが、聞く耳を持たず司令官は無謀な戦いに突入し玉砕する。

ストーリーそのものは単純だが、西部の風景や舞踏シーン、プライド高き新任指揮官が、頑固一徹な古き軍人を好演し、騎兵隊魂をジョン・フォード監督が見事な演出で表現している。おなじみのテーマソング「黄色いリボン」も各所で聞かれ、今、見ても60年も前の作品とは思へない感動を与えてくれた。 S.N

「アメリカ人と良心」

「アパッチ砦」はジョン・フォード監督、ジョン・ウェイン主演の騎兵隊三部作(アパッチ砦、黄色いリボン、リオグランデの砦)のトップバッターとして1948年に製作された。この映画のタイトルシーンの音楽を聴いた途端に、若いころ観た数々の西部劇映画のシーンを思い出した。そして鑑賞後、ジョン・ウェインの気分で映画館を後にしたことも。

舞台はアメリカ南西部アリゾナ州、19世紀末、日本が幕末を迎える時期の物語。白人がインディアンを東部から西部へ追いやり、居留地に押し込めたことから、これに抵

抗するインディアンとの戦いのため騎兵隊が派遣されていた。軽快に走る駅馬車からこの物語が始まり、進軍ラップで始まる騎兵隊の行進では黄色いリボンのテーマ、砦での舞踏会の音楽、そしてアイルランド民謡などの懐かしい音楽が全編に流れる。

西部劇と云えば、残虐なインディアンが登場するが、この物語はインディアンとの戦いに直面する厳しさの中で、騎兵隊員のユーモア溢れる新兵の訓練や女性への礼儀正しさなども織り交ぜ、緊張と詩情豊かな作品で有る。またこの作品は、白人の非情な司令官や悪徳商人を悪とし、誠意を持って当たればインディアンとも共生できることを物語ることにより、アメリカ人の良心を表現している。 au

「不思議な西部劇」

この映画、ジョン・フォードとジョン・ウェインの組み合わせから想像される西部劇とは、一味違った不思議な作品でした。あのジョン・ウェインがライフルを一度も使わないし、殴りあいもしない。実に物静かな役割をそれなりにカッコよく演じているし、あの思慮深く、渋いイメージのヘンリー・フォンダが、頑固一徹で功名心丸出しで、あまり賢いとはいえぬ役柄を巧妙に演じているのですからびっくりしました。

ストーリーははっきり言って、今のセンスからするとピリッとしなない気がしますが、この作品のシチュエーションが60年後の現在でも、世界中の政治・ビジネスの世界でふんだんにみられるので、そのアナロジーを考えながらじっくり見ると深いものがありそうで、西部劇の名作といわれる所以かもしれません。

私としては、西部の実に雄大な景色など、後の西部劇に対してのお手本あるいは原型とも言うべきあまたのシーンや、名子役としてポートレートでしか知らなかったシャーリー・テンプルが、実に愛らしいお嬢さんに成長している姿や、後のジョン・フォード作品に常連の俳優さんの、より若かりし時代の姿などを単純に楽しみました。 森崎

『アパッチ砦』
フィルムデータ

原 題 : Fort Apache
製作年 : 1948年
製作国 : アメリカ
配 給 : セントラル
仕 様 : モノクロ
時 間 : 128分

スタッフ :
監督 : ジョン・フォード
製作 : メリアン・C・クーパー
原作 : ジェームズ・ワナー・ベラ
脚色 : フランク・S・ニュージェント
撮影 : アーチー・スタウト

キャスト :
ジョン・ウェイン
ヘンリー・フォンダ
シャーリー・テンプル
ジョン・エイガー
ペドロ・アルメンダリス

キャスト

778 『Duke ジョン・ウェイン』
ドナルド・シェパード：著 近代映画社

778.2 シャーリー・テンプル・ブラック 平凡社
『シャーリー・テンプル わたしが育ったハリウッド』

778 『ヘンリーフォンダ マイライフ』
タイクマン・ハワード：著 文芸春秋



N 778.2 八尋
『映画で学ぶ』

監督：ジョン・フォード



778 フォード・ダン：著 文芸春秋
『ジョン・フォード伝 親父と呼ばれた映画監』

N 778.2 近代映画社
『ジョン・フォードを楽しむ 西部劇の神様』

N778.2 共同通信社
『20世紀の映画監督名鑑 (Mook21)』

N 778.2 キネマ旬報社
『知っておきたい映画監督 外国映画編』



音楽

N 778.0 大日方 俊子：著
ヤマハミュージックメディア
『知ってるようで知らない
映画音楽おもしろ雑学辞典』



風景

295.3 『アメリカの
カズ・タカハシ』



「シネマ・ド・リブラ」 関連図書案内 & DVD

西部劇

岸春海：編著
『アメリカ文化』



778.0 『シネマ今昔問答』
和田 誠：著 新書館

778.2 芦原 伸：著 日本放送出版協会
『西部劇を読む事典（生活人新書）』



N 778.2 逢坂 剛：著 新書館
『大いなる西部劇』

943.6 カール・マイ：著
筑摩書房
『ヴィネトウの冒険
アパッチの若き勇者』



インディアンの歴史

389 ジャカン・フィリップ：著 創元社
『アメリカ・インディアン 奪われた大地』



の遺産』
学研



382.5 ワールドフォトプレス
『インディアンの生き方』

382.5 デヴィッド・マードック：著
あすなろ書房
『写真でみるアメリカ・
インディアンの世界』



「映画の見方はそれぞれだけど…」

『アパッチ砦』の冒頭でも流れる『黄色いリボン』で知られている曲は、「オール・ラウンド・マイ・ハート」(1839年)が原曲だそう。『知っているようで知らない映画音楽おもしろ雑学事典』(大日方俊子：N778.0)の「音楽も演出した監督」というP132の最初がジョン・フォードだ。フォードほどアメリカ民謡を多く使った監督はおらず、自身はアメリカ生まれだが、両親の出身地であるアイルランド民謡も多用されているという。

三部作といわれる『アパッチ砦』『黄色いリボン』『リオグランデの砦』は、ジョン・ウェインの40才代初めに1年ごとに撮られている。特に『黄色いリボン』がああ音楽と共に有名で、今回、スタッフの誰も『アパッチ砦』を観ていなかったが、同じ曲が使われていたというのが、一様に印象に残ったという感想だった。

インディアンの描き方やヘンリー・フォンダ扮する中佐のキャラクター、その中佐の死後の英雄視など、三作の中でのインディアンの位置づけの変遷は、なかなか興味深いものがある。『映画で学ぶアメリカ文化』(八尋春海：N778.2)には、P32～33に、「先住民族」のページがある。白人の正義と、駆逐されるべき野蛮で攻撃的な「インディアン」の邪悪さの対決がステレオタイプとして、ジョン・フォード監督の騎兵隊三部作から始まったと記されていて、その後、1990年に制作された『ダンス・ウィズ・ウルブス』で、やっとステレオタイプの抽象的集団としての「インディアン」ではなく、誇りある個人として登場すると書かれている。しかし、『アパッチ砦』に登場した酋長は、そんなステレオタイプなインディアンではなく、むしろ白人の非がはっきりと示されていた。

その辺の、インディアンと騎兵隊の描かれ方や観客の視点などは、『シネマ今昔問答』(和田 誠：N778.0)に、P106「西部劇」からP127「ジョン・フォード」・P135「西部劇の監督たち」と続き、更に詳しい。以下、少し抜粋する。

「最近知ったことですが、アメリカ映画のごく初期の

時代には、インディアンをヒーローとして主役に据えた作品もいくつかあったんですって。それがいつのまにか消えた、ということと、映画が産業として発展したことは関係があるような気がします。つまり多くの観客がインディアンを敵とする映画を望んだわけですね。」

「フォード映画の話をするときにはインディアン問題は避けて通れないかもしれない。フォード自身も『私はカスター将軍やら何々将軍をあわせたよりもたくさんインディアンを殺している』と言ってますが、これは冗談で、映画の中の話をしてるわけ。真面目な談話としては『われわれ白人はインディアンに対して考えられる限りの悪行を働いた。アメリカの歴史の汚点だ』と言っています。

もちろんフォードは差別主義者じゃないし、敵として登場するインディアンも決して馬鹿な土民としては描かないですね。作戦に優れた勇敢な戦士になってます。だから主人公たちが危険にさらされる。」

2年前に「映画で楽しむ世界史講座」で『ジェロニモ』を観賞した。ジェロニモはアパッチ族の最後の戦士だ(『インディアンの生き方』ワールド・ムック 244・P80：382.5)。『ダンス・ウィズ・ウルブス』以降、インディアンの描かれ方が変わり(呼び方も「ネイティブアメリカン」と変わった)、「勸善(白人) 懲悪(インディアン)」よりも、史実に即した物語が描かれるようになった。しかし、観客の喜ぶものが必ずしも真実とは限らないとしたら、こういう映画をエンターテインメントとして、多くの人に観てもらおうのは難しいのだろうと思う。

今年『グッド・バッド・ウィアード』という韓国のウエスタンを映画館で観た。いっそ、こういう「みんなワル！」みたいな映画の方が観やすいのかもしれない。しかし、ひたすら続く砂漠の大地を、大陸横断鉄道とバイク、馬、ジープに戦車まで入り乱れて疾走するシーンがあったが、モニュメント・バレーを疾走する騎兵隊とインディアンの映像の方が迫力があつた。 e3

次回の上映会は、「りぶらまつり」(スタジオ1)で開催

2月27日(土) 15:00～17:00『ピクニック』 終了後 18:00 まで映画サロン

2月28日(日) 10:00～11:30『禁じられた遊び』 終了後「調べ学習」発表

森崎健二「たかが映画、されど映画 ～わたしの映画体験～」

14:00～16:00『夜の騎士道』 終了後 17:00 まで映画サロン

『ジョン・ウェインはなぜ死んだか』(広瀬 隆)という本がある(残念だが図書館にはない)。ジョン・ウェインは、ネバダで撮影された多くの映画に出演していた。そのころネバダで盛んだったのが、原爆実験だ。不屈の男ビッグ・ジョンは、ガンとの凄絶な戦いに敗れた。



次回の上映については、上映時間や作品など、変更になる場合がありますので、事前にご確認下さい。